

古代歌謡における短歌形式との対応

加 藤 絢 子

一 はじめに

古代歌謡は、記紀所収の歌謡をはじめとして、風土記、続日本紀、上宮聖徳法王帝説、日本靈異記、万葉集、琴歌譜、古語拾遺などに収められたもの及び仏足石歌があり、さらに、平安時代によく行われた神樂歌、催馬樂、風俗歌、東遊歌その他古今集卷廿に収められた雑歌等の歌謡的性格を持つものまで、広い範囲に及ぶことは周知のことである。

これらの歌謡は、宮廷で行われたりあるいは民衆によつて口ずさまれたりなどして伝誦せられたものであるが、その形式には最も短い、五七七の三句から成る片歌から記紀歌謡の数十句の長歌に至るまで、長短さまざまの体がある。この論文は、これら古代歌謡の形式について、歌謡というものが実際に歌われたものであることを十分に考慮した上で、後世になつて詩歌の主流となつた

短歌形式との関係において形態上の特質を追究するものである。

このことは歌謡が「不定型から定型へと完成された」というような、歌謡の歴史的発展を問題にするものではない。また歌謡が特定の形式を意識して歌われたり、あるいは発想の根本に一定の形式が内在していたという、歌謡の成立過程を論ずるものでもない。即ち、歌謡が持つ、作者や伝誦者などにも意識されなかつたところの、形態にあらわれた結果としての内的連関を類型化し、それを記述することを目的とするものである。

記紀歌謡の形態に注目すると、多くは不定形の長歌であるが、古事記上巻に載録せられている第一番目の歌謡は、須佐之男命大蛇退治の条の

八雲立つ 出雲八重垣 妻ごみに 八重垣作る その八重垣を

という短歌である。左の表に示す如く、記紀の中には短歌体の歌

謡もかなり多く見られ、風土記や続日本紀では短歌の占める割合が大きい。また、時代を下った歌謡では短歌形式をとらない歌謡

歌謡			歌謡		
短歌	その他	計	短歌	その他	計
古事記	44		法王帝説	4	
日本書紀	68		神樂歌	約 110	0
風土記	64	112	催馬楽	63	144
続日本紀	19	20	東遊歌	1	13
琴歌譜	6	8	風俗歌	14	55
旋頭歌	0	14	雑歌	22	61
靈異記	4	10	仏足石歌	0	21
	6	62		21	21
	62	21		39	61

も多いが、一般に記紀の歌謡よりは短い形式になつてゐる。特に神樂歌・催馬楽においては、短歌形式の占める割合は上代の記紀歌謡等に比べて必ずしも多いとはいえないが、これらの歌謡の中にはその一部に反復句を持つてゐる六句体や、あるいは囃し詞の入つてゐるものなどがあつて、それらの句を削除することによつて短歌に縮小することができるような比較的短い形式の歌謡が多いことは注目すべきことである。

すなわち、古代歌謡の形態上の特徴を考えるために、これらの歌謡と短歌形式との対応関係に焦点を合せて考えてみようと思う。

まず、この対応関係を考えるに当つて、その根拠とする条件を次のように考えたい。

歌謡が実際に歌われたものであることを考えた上で、

(1) 短歌形式以外の形式の歌謡であつても、万葉集、古今集、拾遺集等然るべき歌集に短歌として採られていること。

(2) 歌謡相互の間で重出歌を対照することによつて、囃し詞や対句反復句などを省略できると判断したものは短歌形式に対応するものと認める。

(3) 重出歌等を持たない一般の歌謡についても、(1)(2)で見られる対応関係と同様の対応が考えられる歌謡は同じく短歌形式との対応を認める。

以上にのべた方針を基礎に、比較的時代が新しく、また単純な対応関係が考えられると思われる神樂歌を第一の手懸りとして分析していく。

二 短歌形式との対応関係

短歌との対応を考える場合の前提として、さきの条件にも考慮すべき点として挙げたが、歌謡が実際に歌われたものであるということは重要な要素である。従つて、ここではまず、形態を考察する前に歌謡の唱詠法について簡単に触れておく。

（一） 唱詠法

神樂歌は大きく分けて、採物・前張・星の三部から成るが、皆本と末を以つて掛合で歌われる。承德本古謡集の北御門御神樂の中に、

本 河社 篠に折り掛け 篠に折り掛け

末 干す衣 いかにかせばか 七日干すといふ

があり、その註に「件歌九首之中終歌一首分三唱」とあつて、この歌謡は前後の二句に分けて歌われたことが示されている。これと同じ形の神樂歌としては、やはり北御門御神樂^{註1}91があり、また催馬樂の35「竹河」や36「河口」も難し詞や反復句が入っているが、同じ唱詠法を取つたのではないかと考えられる。さらに民謡系統の神樂歌である大前張の大部分は、上句と下句とを

本 木綿垂での 神の幸田に 稲の穂の

末 稲の穂の 諸穂に垂でよ これちほもなし

のごとく本五七七―末五七七とに分けて、第三句と第四句の、「稲の穂の」を反復にして掛合で歌われたと思われる。宮廷神樂である採物では、一首づつの掛合で歌われるのが一般的であるけれども、

この杖は いづこの杖ぞ

天に坐す 豊岡姫の 宮の杖なり 宮の杖なり

に見られる、五七―五七七七のように元来は二段に分けて歌われたものであろう。この歌い方は、仏足石歌体、

丈夫の 踏み置ける足跡は

石の上に 今も残れり 見つつ偲へと 長く偲へと

の歌謡にも通ずる唱詠法であると考えられる。

また続日本紀天平六年二月の条の歌垣の記事には、難波曲・倭部曲・浅茅原曲・広瀬曲・八裳刺曲という五種の曲名が記されていて、古事記の「夷振」が書紀では「夷曲」とあつて、振と曲とは同一のものを指していると言えることから、同名の歌を古代歌謡にあてれば、難波曲は神樂歌難波瀉37、倭部曲は古事記55・56浅茅原曲は古事記111、広瀬曲は万葉集卷七1381、八裳刺曲は古事記23であるので、歌垣の条に記載せられた曲名が実在し、しかも記事に「以本末二唱和」の説明があつて、このうちの前述神樂歌難波瀉37、

本 難波瀉 潮満ちくれば 海人衣

末 海人衣 田蓑の島に 鶴立ちわたる

は大前張の曲で、確かに本末二段に分けて歌われたものと判断できる。従つて、記紀歌謡及び同時代の上代歌謡においても、同系の曲名のある歌謡ではこのような二段唱詠法を取つたことが十分考えられる。さらにまた、これらの歌謡はたとえば前述の難波瀉

は、古今集卷十七913に

なにはがたしほみちくらし あま衣たみののしまにたづなき
わたる

という短歌が収められ、万葉集にも類歌が見られるというものや、

北御門御神楽本91

・三島木綿 肩に取り掛け 肩に取り掛け 誰が代にか 北の

御門と斎ひ初めけむ

が同末90

椎柴に 幡とり附けて 誰が代にか 北の御門と 斎ひ初め

けむ

という短歌体と同時に残されているように、原型としては短歌体であつたものが、歌われる度毎に繰り返され、次第に反復句が入つて固定したものになつてしまい、そのままの型が伝誦せられることになつたものと考えられる。また催馬楽などでは、反復句だけでなく離し詞や挿入句が加えられて、もとの短歌形式から大きく変化しているものもあると考えてよい。従つて、歌謡が以上のような唱歌法をとつたことを考慮しながら、これらの歌謡の原型ともいふべきものを考えてみるのが可能であると思われる。

(二) 対応の型

対応の型を次の四つに分類して考えた。なお、歌謡の番号は、日本古典文学大系3「古代歌謡集」(岩波書店)による。万葉集、古今集、拾遺集等の歌については国歌大観番号を用いた。また歌謡名、歌集名は頭文字などによる略号を用いた。

- 1 反復句の削除による対応
- 2 離し詞の削除による対応
- 3 反復句と離し詞の削除による対応
- 4 歌謡の一部分にみられる対応

ここでは、1、2、3の対応関係を中心に、以下それぞれの型に分類される歌謡を挙げる。

- (a) 1 反復句の削除による対応
A B C D E E → A B C D E

榊葉の 香をかぐはしみ 求め来れば 八十氏人ぞ 圓居せりける 圓居せりける (神 榊本2)

は、拾遺集神あそびの歌577に

榊葉の かを香はしみ とめくれば 八十氏人ぞ 圓居せりける

という短歌を見出すことによつて、神楽歌の第五句と第六句とは単純な反復句とみなして、一方を削除できる。神楽歌において、このような重出歌をもつ対応の例は次に示す十二首である。括弧

の中が重出歌である。

庭燎^{にはび}1 (古^今 1077) 神本² (拾 577) 神末³ (古 1074)

幣本⁶ (拾 579) 弓末¹⁷ (古^今 1078) 劔本²¹ (拾 583)

劔末²² (拾 582) 鉾末²⁶ (拾 581) 杓末²⁸ (古 1079)

葛本²⁹ (古 1076) 葛末³⁰ (古 1077) 日靈女歌末⁷⁴ (拾 584)

これらの例によつて、他の単独の神樂歌についてもA B C D Eの型は第六句を削除して短歌形式に縮小できるとすれば、

杖本⁸ 篠本¹² 篠末¹³ 鉾本²⁵ 弓末¹⁶ 杓本²⁷

日靈女歌本⁷³ 竈殿遊歌本⁸⁴

の八首もこの型である。この他神樂歌以外の同時代の歌謡では、

催馬楽美濃山⁵¹ 風俗歌伊勢人²¹ 同甲斐歌²²

の三首とさらに

鈴鹿川 八十瀬の瀧を みな人の 賞づるも著く 時にあへる 時にあへるかも

また、次の二首の対句をもつものも、歌うということに因るものと思われのでこの型に分類される。

伊勢の海の 清き渚に しほがひに なのりそや摘まむ 貝

や拾はむや 玉や拾はむや

婦と我と いるさの山の 山蘭 手な取り触れそや 貌優

るがにや 速く優るがにや

上代の歌謡では、仏足石歌においてこの対応が顕著である。

たとえば

御足跡作る 石の響きは 天に到り 地さへ揺すれ 父母が

ために 諸人のために

のように、第五句と第六句が簡単な反復ではなく、対句的な繰り返しになつてゐるのが仏足石歌の特徴ともいえる。そしてこの対応は仏足石歌二十一首中、

- 1 3 4 6 7 9 10 13 14 15 17 18 19

の十三首あつて、圧倒的な比率を占める。即ち、古代歌謡全体でこの種の対応關係を示すと考え得るものは、全部で三十九例に及ぶ。

(b) A B C D E C → A B D E C

この型の対応は、旋頭歌体五七七五七七において、第三句と第六句とが反復句又は対句となつていて、形式的に第三句を削除して短歌形式に縮小するもので

八田の 一本菅は 獨り居りとも 大君し よしと聞こさば

獨り居りとも

をはじめ、記49、紀99の三首と、また、万葉集旋頭歌卷七 1279

梓弓 引津邊にある 莫告藻の花 採むまでに 逢はざらめ

やも 莫告藻の花

は形式的にA B D E Cの短歌形式に縮小できるが、意味の上ではA B C D Eとなるべきであろう。また、同巻七1284

梯立の^(A)倉椅川の^(B)川のしづ管^(C) わが刈りて^(D) 笠にも編まぬ^(E)
川のしづ管

は意味上D E A B Cで、名詞止めのかたちを取る、この型が一般的である。次の十一首はいずれもこの例である。

1018 (巻六)、 1279 1282 1283 1284 1286 1290 1293 (以上巻七)、
1610 (巻八)、 3879 3882 (以上巻十六)

さらに

み吉野の 瀧もとどろに 落つる白波 留りにし 妹に見せ
まく 欲しき白波

〔巻十三 3233〕

では、第六句は第三句の反復となるところであるが、第五句「妹に見せまく」に引かれて欲しきという句を置いて第三句に対応する句が入れられたと考えれば、第三句を削つて短歌に対応させることができる。また、

水門の 葦の末葉を 誰か手折りし わが背子が 振る手を
見むと われそ手折りし

〔巻七 1288〕

では、上句と下句の間に問答的な関係が成立している。この歌謡が実際に歌われた時のことを想像すれば、終りの第六句を予期して第三句に疑問形のことばを折り込んだということも十分に考え

られる。従つてこの第三句も挿入句的なものとして削除し、短歌形式に縮小する。万葉集以外では

あたらしき 猪名部の工匠 繫けし墨縄 其が無けば 誰が
繫けむよ あたら墨縄

〔紀 80〕

では、第三句と第六句は脚韻式の対句になつていゝもので、やはりこのタイプの対応とみなす。以上万葉集旋頭歌を中心に十七例をこの型に分類する。

(c) A B C C D E → A B C D E

神楽歌難波湊本末37では、前述のように古今集巻十七雑上913に短歌として収められていることから明らかなように、五七五七七で本末二段に分けて歌われたために、上句の終りと下句の始めとを同じ句で反復している。従つて短歌に縮小されるものであるが、同じような例は、神楽歌で、

木綿垂で本36(琴 片降3) 榛本末38(拾 585)

宮人本末35(古語拾23a) 朝倉79

の合計五例を挙げることができる。

(d) A B B C D E → A B C D E

北御門御神楽本91は

三島木綿 肩に取り掛け 肩に取り掛け 誰が代にか 北の
御門と 斎ひ初めけむ

とあり、歌われた時に反復句が置かれたものと考えられる。しかもこの歌謡と前後して、北御門御神楽90と92が下句を全く同じくする短歌として収められていることから、明らかに短歌形式に縮小されるものである。また同様に、北御門御神楽末93もこの例である。

(e) A B C D E B
A C D E B A B C D E

この型では、もとの歌謡がA B C D E Bの型であり

愛しき^(A) 小目の小竹葉に^(B) 霰降り^(C) 霰降るとも^(D) な枯れそね^(E)

小目の小竹葉に^(B) [風土記10]

では、第六句Bを削つて、A B C D Eの短歌とし

春日すら^(A) 田に立ち疲る^(B) 君はかなしも^(C) 若草の^(D) 嬬無き君^(E)

し 田に立ち疲る^(B)

では、形式的に第二句を削つて、A C D E Bの短歌に縮小する。

(f) その他の型

(i) A B B C D E E → A B C D E

大原や^(A) せが井や^(B') せが井の水を^(B) 杓もて^(C) 鶏は鳴くとも遊^(D)

ぶ瀬を汲め^(E) 遊ぶ瀬を汲め^(E) [神 片折本・27a]

我が門の^(A) 板井や^(B') 板井の清水^(B) 里遠み^(C) 人し汲まねば^(D) 水^(E)

さびにけり^(E) 水さびにけり^(E) [神 片折本・28a]

この二首は、先にあげたA B C D E E → A B C D Eの対応と同じタイプのものである。

(ii) A B C B' B' → A B C D B' (又はB')

大君の^(A) 御子の柴垣^(B) 八節結り^(C) 結り廻し^(D) 截れむ柴垣^(B')

焼けむ柴垣^(B') [記 109]

(iii) A B C D A B → A B C D B

小筑波を^(A) 越ゆ過ぐり来ぬ^(B) 帰り来てや^(C) 誰が戀ひ過ぐや^(D)

小筑波を^(A) 越ゆ過ぐり来ぬ^(B) [風俗 小筑波1]

(iv) A B C C' C D E E → A B C D E

大路に^(A) 沿ひてのぼれる^(B) 青柳が花や^(C) 青柳が花や^(C) 青柳が^(C)

攪ひを見れば^(D) 今さかりなりや^(E) 今さかりなりや^(E)

[催 大路14]

(v) A A B C D E F → A B C D E

難波の海^(A) 難波の海^(A) 漕ぎもて上る^(B) 小舟大船^(C) 筑紫津まで^(D)

に 今少い上れ^(E) 山崎までに^(D') [催 難波の海56]

(vi) A A B C C' C C D E E → A B C D E

本滋き^(A) 本滋き^(A) 吉備の中山^(B) 昔より^(C) 昔から^(C) 昔より^(C)

名^(C)の舊りこぬは^(D) 今の代のため^(E) 今日の日のため^(E')

[催 本滋き50]

2 離し詞の削除による対応

(a) 短歌の前後いずれかに離し詞を置いたもの
次にあげる例は、この種の対応を示す例で括弧内は重出の短歌である。

(イ) アチメ一度オオオ三度＋短歌体

年中行事秘抄雑歌68

あちめ一度おおお三度 我妹子が穴師の山の 山のもと 人
も見るがに 深山鬘^{かづら}せよ (古今 1076・神 29)

同雑歌64

あちめ一度おおお三度 石の上 布留社の 太刀もがと 願
ふその子に その奉る (神 22)

同雑歌65

あちめ一度おおお三度 獵夫^{さつを}等が もたぎの真弓 奥山に
御狩すらしも 弓の弾^{はず}みゆ (神 18)

同雑歌66

あちめ一度おおお三度 上ります 豊日靈女が 御魂ほす
本は金矛 末は木矛

また、同じく年中行事秘抄中の雑歌69、70の二首は、音数が不揃いではあるけれども旋頭歌に対応する。

(ロ) オオオオオオ＋短歌体

東遊歌倭歌11

おお おお おお 天つ風 雲の通ひ路 吹き閉ぢよ 少女
の姿 暫ら止めむ (古今 872)

(ハ) アハレヤ＋短歌体

風俗歌陸奥歌9

あはれや 阿武隈に 霧立ちわたり 明けぬとも 夫をば遣
らし 待てば術なしや (古今 1087)

(ニ) 短歌体＋エイヤエイヤ三度

皇太神宮年中行事雑歌34a

我が君の 命を請はば 細石の 巖となりて 苔の生すまで
ゑいやゑいや三度 (古今 343、雑 34)

(ホ) 短歌体＋サキムダチャ

催馬楽道の口20

道の口 武生の国府^{コフ}に 我はありと 親に申したべ 心あひ
の風や さきむだちや

同じく、更衣21も第二句の離し詞はそのままにして、この型に入
れておく。

(b) 短歌ABCDEの間に離し詞が挿入されたもの

(イ) A B C D E アノ ↓ A B C D E

最上川^(A) 上れば下る^(B) や| 稲舟^(C)の 否にはあらず^(D) や| 暫し

ばかりぞ あ(E)の
〔風俗 出羽風俗35 (古今1092)〕

御侍 御笠と申せ せ(B)や
宮城野(C)の 木(D)の下露は 雨(E)にまさ

れりや あ(B)の
〔風俗 陸奥風俗34 (古今1091)〕

名取川 幾瀬(B)か渡る や
七瀬(C)とも八瀬(D)とも 知らずや 夜

来しかば あ(E)の
〔風俗 陸奥風俗30〕

(四) A B C D ヤレ・ソヨヤ・ナヤ E → A B C D E

伊予越え(A)の なごえ(B)の葛 我が引かば やうやう寄り来 や

れ そよや なや 忍び忍びにや

〔體源抄風俗48 (古今1078 神17)〕

伊予の湯(A)の 湯桁(B)は幾つ いさ知らず や 算へず數ます

やれ そよや なよや 君ぞ知るらうや
〔同風俗46〕

伊予の湯(A)の下 下より湧く(B)の 白絲(C)の や 来る人絶えぬ

やれ そよや なや ものにぞありけるや
〔同風俗47〕

(五) A B ヤ・オケ C D E → A B C D E

飛鳥井(A)に 宿り(B)はすべし や おけ 蔭(C)もよし 御甕(D)も寒し

御秣(E)もよし
〔催 飛鳥井8〕

(六) A ヤ B アイソ C D D → A B C D D

若草(A)の や 妹(B)ものせたり あいそ 我も乗りたりや 船傾(D)

くな 船傾(E)くな
〔神 しが鳥末39a〕

3 反復句と囃し詞の削除による対応

(a)

A B ヤ C ハレ C D ヤ E アハレ・ソコヨシヤ E → A B C D E

新しき 年(B)の始めに や 斯く(C)しこそ はれ 斯く(C)しこそ

仕へまつらめ や 萬代(E)までに あはれ そこよしや 萬代

までに
〔催 新しき年27 (続紀1・琴14・雑24)〕

梅が枝(A)に 来居る鶯(B)や 春(C)かけて はれ 春(C)かけて 鳴け

どもいまだ や 雪(E)は降りつつ あはれ そこよしや 雪は

降りつつ
〔催 梅が枝 (古今5)〕

澤田川 袖漬(B)くばかり や 浅(C)けれど はれ 浅(C)けれど 恭

仁(D)の宮人 や 高橋(E)わたす あはれ そこよしや 高橋(E)わた

す
〔催 澤田川2〕

(b) O A B ヤ C ハレ C D ヤ B アハレ・ソコヨシヤ B → A B C D E

あな尊(A)と 今日(B)の尊(B)ときや 昔(C)へも はれ 昔(C)へも 斯く

やありけむ や 今日(E)の尊(E)さ あはれ そこよしや 今日(E)の

尊(E)さ
〔催 あな尊と26〕

A B B C {ナヨヤ
アハレ C {ナヨヤ
ハレ C D D E E → A B C D E

美作(A)や 久米(B)の 久米(B)の佐良山 さら(C)さらに なよや さら

さらに なよや さら(C)さらに 我(D)が名 我(D)が名は立てじ 萬

代(E)までにや 萬代(E)までにや
〔催 美作41 (古今1083)〕

高山^(A)に 鷹^(B)を 鷹^(B)を放ちあげ 招^(C)ぐをなみ あはれ 招^(C)ぐを
なみ はれ 招^(C)ぐをなみ 我がす^(D) 我がする時に 會^(E)へる夫
かもや 會^(E)へる夫かもや
〔催 高山40〕
同様に

催馬楽この殿は37 同この殿の西38 同この殿の奥39

同藤生野42

もこの例である。

(c) A B B C ハレ C D D E → A B C D E

竹河^(A)の 橋のつめなるや 橋のつめなるや 花園^(C)に はれ
花園^(C)に 我をば放てや 我をば放てや 少女伴^(E)へて
〔催 竹河35〕

○ A B B C ハレ C D D B → A B C D B

河口^(A)の 関^(B)の荒垣や 関^(B)の荒垣や 守れども はれ 守れど
も 出でて我寝ぬや 出でて我寝ぬや 関^(E)の荒垣
〔催 河口36〕

(d) A B C C C D E → A B C D E

甲斐^(A)が嶺を さやにも見しか や 心なく 心なく 横^(D)はり
立てる さやの中山^(E) 〔風俗 甲斐10 (古今1097)〕
大ひれや 小ひれの山は や 寄りてこそ 寄りてこそ 山
〔催 甲斐10 (古今1097)〕

は良^(D)らなれや 遠目^(E)はあれど
〔東遊 片降8〕

(e) A B C オケオケ C D E オケオケ → A B C D E

本・伊勢志摩^(A)の 海人の刀禰^(B)らが 焼く火の氣^(C) おけおけ
末・焼く火の氣^(C) 磯^(D)らが崎に 薫^(E)りあふ おけおけ
〔神湯立歌75〕

次の歌、神樂歌湯立歌76

本・大君^(A)の 弓木^(B)とる山の 若櫻^(C) おけおけ
末・若櫻^(C) とりに我ゆく 舟楫^(E) 人貸^(F)せ おけおけ
も、この型にFが入つていて、「おい君、貸してくれよ」の意で
挿入句とみなして削除する。

(f) A B A イソ C D E E → A B C D E

しながどる や 猪名^(B)の湊に あいそ 入る船^(C)の 楫^(D)よくま
かせ 船傾^(E)くな 船傾^(E)くな 〔神 しなが鳥本39〕
しながどる や 猪名^(B)の柴原^(F) あいそ 網^(C)さすや 我が夫^(D)
君は 幾^(E)らか獲りけむ 幾^(E)らか獲りけむ 〔神 猪名野末41〕

○ A B A イソ C D E D → A B C D E

しながどる や 猪名^(B)の柴原 あいそ 飛^(C)びて来る 鳴^(D)が羽
音は 音おもしろき 鳴^(D)が羽音
(g) A B C C A D E E → A B C D E

(h) 筑波嶺の 此の面彼の面に 蔭はあれど や 君が御蔭に
増す蔭も 増す蔭もなしや 〔風俗 常陸11 (古今1095)〕
ABC^(A)CD^(B)E^(C)F^(D) → ABC^(A)DEF^(B)

常陸にも 田をこそ作れ あだ心 や かぬとや君が 山を
越え 雨夜来ませる 〔風俗 常陸12〕
筑波山 葉山繁山 繁きをぞ や 誰が子も通ふな 下に通
へ 我が夫は下に 〔風俗 筑波山13〕
ABC^(A)CD^(B)E^(C)F^(D) → ABC^(A)DEF^(B)

(i) ABC^(A)CD^(B)E^(C)F^(D) → ABC^(A)DEF^(B)
君を措きて 他し心を 我が持たば や なよや すゑの松
山 浪も越え 越えなむや 浪も越えなむ
〔風俗 君を措きて (古今1063)〕
ABC^(A)CD^(B)E^(C)F^(D) → ABC^(A)DEF^(B)

(j) ABC^(A)CD^(B)E^(C)F^(D) → ABC^(A)DEF^(B)
彼の行くは 雁か鶴か 雁ならば はれや とうとう 雁な
ら 名宣ぞせまし なほ鶴なりや とうとう
〔風俗 彼の行く25〕
ABC^(A)CD^(B)E^(C)F^(D) → ABC^(A)DEF^(B)

(k) アハレABC^(A)アハレCDE^(B)アハレE^(C) → ABC^(A)BCDE^(B)
あはれ ちはやぶる 賀茂の社の 姫小松 あはれ 姫小松
萬代経とも 色は變 あはれ 色は變らじ
〔東遊 求子歌7〕
ABC^(A)CD^(B)E^(C)F^(D) → ABC^(A)DEF^(B)

(l) ABC^(A)CD^(B)E^(C)F^(D) → ABC^(A)DEF^(B)

いで我が駒 早く行きこせ 待乳山 あはれ 待乳山 はれ
待乳山 待つらむ人を行きてはや あはれ 行きてはや見
む 〔催 我が駒1〕
ABC^(A)CD^(B)E^(C)F^(D) → ABC^(A)DEF^(B)

(m) ABC^(A)CD^(B)E^(C)F^(D) → ABC^(A)DEF^(B)

青柳を 片絲によりて や おけや 鶯の おけや うぐひ
すの 縫ふといふ笠は おけや 梅の花笠や
〔催 青柳9 (古今1081) 神104〕
ABC^(A)CD^(B)E^(C)F^(D) → ABC^(A)DEF^(B)

(n) A₁ABC^(A)CD^(B)E^(C)F^(D) → ABC^(A)BCDE^(B)

鴛鴦 鴛鴦 鴨さへ来居る 蕃良の池の や 玉藻はま根な刈
りそ や 生ひも継ぐがに や 生ひも継ぐがに
〔風俗 鴛鴦4〕
A₁ABC^(A)CD^(B)E^(C)F^(D) → ABC^(A)BCDE^(B)

(o) AヤレナBヤレナCDD^(B)E^(C) → ABC^(A)BCDE^(B)

鶴の羽に やれな 霜降りや やれな 誰かさ言ふ 千鳥ぞ
さ言ふ 鶴ぞさ言ふ 蒼鷺ぞ 京より来てさ言ふ 〔風俗 鶴〕
AヤレナBヤレナCDD^(B)E^(C) → ABC^(A)BCDE^(B)

(p) ABC^(A)CD^(B)E^(C)F^(D) → ABC^(A)DEF^(B)

本・殖槻や 田中の森や 森や てふかさの 浅茅が原に
末・我措きて 両妻とるや とるや てふかさの 浅茅が原
に 〔神 殖槻51〕
ABC^(A)CD^(B)E^(C)F^(D) → ABC^(A)DEF^(B)

さらに、アレンジの著しいもので、一見、短歌との対応に気がつかぬものも、単純な反復句や囃し詞及び挿入句を削除することによつて、まとまつた短歌形式にまで縮小することが可能である。

(q) A A B B C C C C D E D E → A B C D E

席田の^(A) 席田の^(A) 伊津貫川に^(B) や 住む鶴の^(C) 住む鶴の^(C) や
住む鶴の^(C) 千歳を豫ねてぞ^(D) 遊びあへる^(E) 千歳を豫ねてぞ^(D)
遊びあへる^(E) 〔催 席田47〕

(r) A B C C C D C D E F C F C → A B D E F

本・大宮の^(A) 少さ小舎人^(B) や 手手にやは^(C) 手手にやは^(C) 玉^(D)
ならば^(D) 手手にや^(C)
末・玉ならば^(D) 晝は手に取り^(E) や 夜はさ寝め^(F) 手手にや^(C)
夜はさ寝^(F) 手手にや^(C) 〔神 大宮53〕

(s) A B C C C C D E E E → A B C D E

本・木綿作る^(A) 信濃原に^(B) や 朝尋ね^(C) 朝尋ね^(C) 朝尋ね^(C) や
末・朝尋ね^(C) 汝も神ぞや^(D) 遊べ遊べ^(E) 遊べ遊べ^(E) 遊べ遊べ^(E)
〔神 木綿作る本末72〕

(t) A B C C ナヨヤ・ライシナヤ・サイシナヤ C C ハレ C D E ヤライシナヤ・サ

イシナヤ E E → A B C D E
真金吹く^(A) 吉備の中山^(B) 帯にせる^(C) なやや^(C) らいしなや^(C) さ
いしなや^(C) 帯にせる^(C) 帯にせる^(C) はれ^(C)

帯にせる^(C) 細谷川の^(D) 音のさやけさ^(E) や らいしなや^(C) さい
しなや^(C) 音のさや^(E) 音のさやけさ^(E)

〔催 真金吹く32 (古今1082 神105 万葉1102)〕

ここまでは、神楽歌系統の歌謡を中心に例を挙げてきたが、これらの対応の型を上代の例において考えることはできないものであろうか。たとえば、古事記、尾津の埼における倭建の命の歌に、

尾張に^(A) 直に向かへる^(B) 尾津の埼なる^(C) 一つ松^(D) あせを^(D)

一つ松^(D) 人^(E)にありせば^(E) 太刀佩けましを^(F) 衣着せましを^(F) 一つ松^(D) あせを^(D)
〔記 29〕

は、神楽歌と同じように、前後二段に分けて掛合で歌われたものであろうと推測される。そして書紀27に重出する

尾張に^(A) 直に向かへる^(B) 一つ松^(C) あはれ^(D)

一つ松^(D) 人^(E)にありせば^(E) 衣着せましを^(F) 太刀佩けましを^(F)

と対照すれば、記の「あせを」(吾兄よ)が、紀で「あはれ」というし囃詞になつてゐることで、記の方も囃し詞的な呼び掛けと考えられる。また、記Cの「尾津の埼なる」は紀には見られず、地名をよんだ挿入句と見ることが出来る。さらに、FとFとは、対句の型をとつていて、記と紀では位置が逆であるので、どちらが主であるということは判断し難いが、歌謡の筋としては、Fの「太刀佩けましを」であろう。従つて、記29は

(u) A B C D アセヲ D E F F' D アセヲ → A B D E F

という対応によつて

尾張に 直に向かへる 一つ松 人にありせば 太刀佩けま
しを

という短歌に縮小することができる。同様にして、

水そそぐ^(A) 臣の嬢子^(B) 秀罽取らすも^(C) 秀罽取り^(D) 堅く取らせ^(E)
下堅く^(E') 彌堅く取らせ^(E') 秀罽取らす子^(C) [記 103]

は琴歌譜13と参照して

(v) A B C D E' E C → A B D E C

の対応を考えうる。

4 歌謡の一部分にみられる対応

1 2 3では、長い歌謡を短歌形式に縮小するという型の対応であつたが、その外に、縮小ということを離れて神楽歌系統の歌謡とくに催馬樂で、一首として伝誦せられてきたものの中に、二段にわけて歌われ、その各段が短歌としてまとまっているものがある。たとえば「我が門13」では (A B C D D) + (P B C D D) という形をしており、その他、序にあたるものと短歌といった形も見られる。さらに上代の歌謡では、この関係が単に偶然的なものではなく、雅楽寮に關係する歌謡の歌謡名と結びつけて考えられる。たとえば「夷振の片下」にみられる対応¹では、雅楽寮歌と

して、夷振の片下なる唱詠法があつて、

大君を^(A) 島に放らば^(B) 船餘り^(C) い帰り来むぞ^(D) 我が疊ゆめ^(E)
言をこそ^(x) 疊と言はめ^(y) 我が妻はゆめ^(z) [記 86]

は、(A B C D E) + (x y z) の二つの部分にわけて歌われたと考えられるので A B C D E の部分は短歌として独立する。あるいはまた、志都歌の歌返・読歌・酒楽歌・来目歌など、歌名のある歌謡を中心にして、神楽系の歌謡に見られたと同じように、歌謡が二段にわかれて、そのどちらか一方、あるいは両方に短歌形式としてまとまりを持った歌謡が含まれている。

すなわち、この対応は、前にのべた1 2 3の縮小による対応とは異つた対応關係であるといえるので、本稿では省略する。

三 結 び

本稿では、古代歌謡の内的連関を記述することを目的として、特に短歌形式に縮小できる歌謡について類型化してみた。それぞれの対応の型は、1 2 3に述べたごとくであるが、これらの対応の型を全体的にとらえてみると、大体次のことが言えると思う。まず囃し詞は、アハレとかヤという短いものが中心であるが、他には、歌謡の句の中の一音を受けて繰り返すとか、全く無關係な語句を連ねるなど種類も色々であつて、反復句や挿入句よりも

即興的に用いられる傾向がある。従つて、同系の歌謡ではある程度一定の位置に置かれるが、全体としては定位置とはいえない。

そこで3で述べた反復句と囃し詞の削除による対応の例も、反復句のみを中心にして考えてみる事が可能である。

古代歌謡全体の対応の型として、次の型が有力である。

仏足石歌十三例と神楽歌系二十六例をもつ、

ABCDE → ABCE

の対応は、囃し詞の入つたものでは

A^ヤB^{アイソ}CDEE → ABCE

ABCC^ヤDEE → ABCE

ABCC^{ヤ・ナヨ}DEE^ヤ → ABCE

{A₁A₂BC^ヤD^ヤE^ヤE} → ABCE

の例がある。そして、神楽歌特有の対応型として考えられた

ABCCDE → ABCE

の対応では、囃し詞が入つて

AB^ヤCCDE → ABCE

ABCC^{オケオケ}CDE^{オケオケ} → ABCE

ABCH^{ハレヤ・トウトウ}CDE^{トウトウ} → ABCE

ABCC^{ヤ・オケヤCオケヤCDオケヤE} → ABCE

があつて、この二つの型、つまり、ABCCDEE → ABCE

とABCCDE → ABCEとが重なつたものには

AB^ヤCH^{ハレ}CD^{ヤEアハレ・ソコヨシヤE} → ABCE

AB^ヤCH^{ハレ}CD^{ヤBアハレ・ソコヨシヤB} → ABCDB

の例を見ることが出来る。

さらに、アレンジの著しいものでは、CとEにあたる部分を、二回以上反復することによつて変化をつけている例が主な型であることは、3の分類を参照されたい。また、変わった反復の型としては

ABBC^{ハレ}CCDE → ABCE

ABBC^{ハレ}CCDD^B → ABCDB

などがあるが、大勢を占めるものではない。

一方、囃し詞が加わつた例は極めて少いけれども、単純な反復による、万葉集旋頭歌を中心とした

ABCEC → ABCE

という対応の型も見逃すことができないものである。

なお、縮小した短歌の形式として、ABCDEの他に、ABCDB、ABCCDDなど短歌の内部に反復句をもっているものを考へているが、これらは記紀の歌謡中にこの形式の短歌例を多く見出すことができるからである。(拙稿、古代歌謡の形態学的研究

99頁)

以上のように、古代歌謡において、短歌以外の比較的短い形式を持つた歌謡について、ある程度までは整った形として、短歌形式に縮小することを考えることができた。しかしながら、古代歌謡の総数から見れば、限られた範囲の歌謡にすぎないものであり、古代歌謡のすべてをこのような対応関係をもつて説明することは不可能であるが、先にのべた三つの対応の型を中心として、古代歌謡と短歌形式との対応関係を考えることは可能だといつてよい。

註1 歌謡の番号については四頁を参照されたい。

(昭四二 日文卒)